

「新潟大学」

地域に学ぶ

地域を学ぶ

実践活動レポート

初めての

海外渡航

2月16日、シンガポールのチャンギ国際空港に、水球部に所属する学生15名とともに到着した。3月13日までの約1カ月の長期滞在計画である。

15名の学生のうち、8名は初めての海外渡航であった。学生らは、日本の文化や製品等に対する海外の方の憧れ（いわば

「ジャパン・ブランド」を肌で感じたと言っていた。また、世界的な物産高騰や円安を強く感じたと述べていた。

学生らが上記のようなことを苦勞として肌で感じることが非常に有意義であると考える。また、今回の渡航では数日間の短期的な観光地巡りと違い、現地の方と長期にわたって友好的に交流できた点が良かった。

このような経験が海外でできるのは、本学水球部員が中心となって、水球のまち推進室の海外チーム合宿誘致活動のサポート等に積極的に参加した実績があったことだと思っている。この1年間を振り返ると、五つの海外チームが来柏し、学生と交流した。

たとえば、この4月にはフィリピン代表チームが来柏。市内のわきび園、谷根のじます釣り堀、恋人岬、フィッツシャーマンスケープ等を学生が案内し、高柳・荻ノ島かやぶきの里「荻の家」では囲炉裏を囲んで懇親会を行った。

また大学体育館での授業に同チームが参加し、授業を履修していた多くの学生と交流した。学生があたたかなホスピタリティを持って海外ゲストを迎え、柏崎の魅力を紹介込んだ観光アテンドを行う。そこでの交流から絆を深め、その関係性を温め続けることで、本学ならではの見える長期海外渡航が実現している。このような経験から、学生がより国際的な人材となっていくてくれたらと願っている。

経済学部助教・佐々木洋輔
（同大学地域連携センター）



念願の酒

「わたしの萩ノ島」

売り上げ一部かやぶき集落維持に

市内高柳町萩ノ島で栽培した酒米「五百万石」を使った純米吟醸酒「わたしの萩ノ島」が4月29日から数量限定で発売された。同町岡野町、石塚酒造の製造。同地区にとって、念願の日本酒。

市内高柳町萩ノ島で栽培した酒米「五百万石」を使った純米吟醸酒「わたしの萩ノ島」が4月29日から数量限定で発売された。同町岡野町、石塚酒造の製造。同地区にとって、念願の日本酒。

同地区のカフェ店長の橋本和明さんを中心に、同地区住民や同社社員らが一丸となって田植えから収穫まで取り組んだ。その酒米を93%使用し、残りの7%を高柳産

もち米で、同社の特徴の四段仕込みで造り上げた。冬場仕事で橋本さん、元地域おこし協力隊員の小柴康隆さんらも手伝った。

同社の杜氏（とうじ）・金沢要介さん（38）は「昔ながらの仕込みで、もち米の優しい甘み、『五百万石』のすっきりと、きれいな味わいを両立させた。お酒を絞るときに、一番いい部分の「中取り」だけを集

めて瓶詰めした」と話す。萩ノ島自振興会長で合同会社萩ノ島ふるさと村組合代表理事の春日俊雄さん（71）は「10年ほど前から萩ノ島で日本酒ができればいいと思っていた。お酒を通し、新しいつながり、絆が生まれたらいい」と期待を寄せる。

「わたしの萩ノ島」は精米歩合60%、アルコール分は14度。ラベルはデザイナー・梅原真さんの作品で、萩ノ島のかやぶき、小さな集落をイメージした。数量限定で300本。1本720ミリットル1760円（税込み）、このうち1本につき300円寄付。取り扱いには石塚酒造（電話41・2004）へ。



数量限定で発売された純米吟醸酒「わたしの萩ノ島」



— 地域に学び・地域におこす — 自立的学習者育成を 産大公開セミナーで考える

新潟産大（梅比良眞史学）の課題「地域に学び、地域められる教育と地域連携」が4月28日、同大で開かれた。同大教職

員ら約70人が参加し、今後の大学の進むべき道を考えた。

梅比良学長はあいさつで「本年度は初年次教育をアップデートし、『開学元年』と位置付けている。このセミナーを機会に大学が変わっていくと思っただければ幸いと述べた。

講師の一人で、昨年から1年間、同大の初年次教育改革をアドバイスした山本啓一・北陸大教授は「AIの進化はとてつもなく早い。大学で4年間プログラミングなどを学ぶよりも社会的変化に対応できる自立的学習者を育てていくべきだ」とした。続いて阿部雅明・産大経済学部長が教育改革として、1年生の基礎ゼミに担任教員のほかSA（学生アシスタント）とCLA（職員副担任）を加え、情報を共有しバックアップする体制を説明した。

さらに住吉廣之・同大副学長が前任の松本大での地域連携の取り組みを紹介。「学生にも教育の中で研究のプロセスを踏まえ、地域課題解決の経験を積むことにより自信を持たせること

ができる」とした上で「大学は地域を元気にする若手人材の供給源。若手が存在し、定着することで地域が活性化する。その実現に向け、産官学民挙げての協働を期待する」と述べた。

新潟産大の公開セミナー
〓 同大

「新治大学」地域に学ぶ

地域を愛する

— 史跡活動レポート —

市民有志による歓迎会

～ようこそ柏崎へ～

先日、新潟工科大学の講堂で「新潟産業大学・新潟工科大学新入生合同歓迎会」が開催された。同会は柏崎市民の有志と両大学の実行委員会が中心となり、今春から柏崎市で新生活を送っている両大学の新入生を対象に行われた歓迎イベントだ。コロナウイルスの影響も落ち着きはじめた今年は、4年ぶりに合同開催の形で行われた。

歓迎会は日本海太鼓の迫力ある演奏で始まり、柏崎市の桜井市長、西川正男柏崎商工会議所会頭から新入生に向けて歓迎と激励のメッセージをいただいた。両大学の在校生からは、この日のために結成された軽音楽部の合同バンドによるライブ、学友会による柏崎市の観光や飲食店に関するクイズが話題された。

クイズの全問正解者は柏崎のPRキャラクター「えちゴソ」から景品が手渡され、会場は大いに盛り上がりがあった。また、

歓迎会には日本海太鼓の迫力ある演奏で始まり、柏崎市の桜井市長、西川正男柏崎商工会議所会頭から新入生に向けて歓迎と激励のメッセージをいただいた。両大学の在校生からは、この日のために結成された軽音楽部の合同バンドによるライブ、学友会による柏崎市の観光や飲食店に関するクイズが話題された。

参加した市外出身の本学新入生・田中駿希さんは「私たちのために、地域一体となつてこのようなイベントを企画していただき、非常に歓迎されていると感じました。今年は大合同開催という事で、新潟工科大学の学生とも交流することができ、貴重な機会でした」と振り返った。同歓迎会実行委員長の山田大介さんは学生に向けて「市内だけではなく、県内、県外さまさまな出身の学生の皆さん、まご

た、柏崎の銘菓を詰め合わせた「kashimaimai」が参加した学生全員にプレゼントされるなど、これから大学生活を過ごす柏崎市に関心を持つてもらえるようにと、趣向を凝らした内容だった。

そ柏崎へ。柏崎市民の歓迎の気持ちは伝わりました。これから始まる学生生活の中で柏崎の素晴らしいところを実感してほしい」と語った。

からいただいた歓迎の意を力に変え、4年間で多くのことをこの地で経験し、地域を支える人材に成長することを願う。
（同大学地域連携センター）



市民大学に4コース

6月開講 多彩な分野で専門家から

市教育委員会は市民大学の前期講座を6月から市民プラザで開講する。「きつと見つかる なりたい『私』」をテーマに、さまざまな分野から4講座。市民大学は、市民が幅広い知識を習得することで、学ぶ喜び・楽しみ・生きがいを見出し、地域の活力につなげることが狙い。前期は、市内の二つの大学と連

携する。各講座とも、時間は午後7時～9時、講師は座大・工科大の教授、准教授、講師ら。受講対象は18歳以上。申し込みは今年21日まで。直接またははがき、ファクス、電子メールに講座名・郵便番号・住所・氏名（ふりがな）・年齢・性別・電話番号を記入し、市民大学事務局の文化・生涯学習課

（〒945-0051、市内東本町1-3-24、ファクス22・26337、メールアドレスcity.kashiwaza@kaiigata.jp）へ。市ホームページからも申し込み可能。定員を超えた場合は抽選、定員に満たない場合は締め切り後も先着で受け付ける。問い合わせは同課（電話20・7500）へ。開講は次の通り。

【市民大学】「奈良美術への誘い（いざな）い興福寺と盤満寺の仏像」116月9日～7月14日、4回、20人、1500円▽「初心者のためのWord講座」116月6日～7月18日、7回、平野実良・座大専任講師、15人、3500円▽「暮らしに役立つバイオテクノロジーって何？」116月8日～7月6日、4回、小野寺正幸・工科大准教授、仁平高則・同、20人、2千円

「柏崎の魅力」柏崎で楽しく心豊かに生きるには116月26日～7月10日、3回、春日俊雄・座大客員講師

新潟産大と附属高 連携の清掃で 海岸きれいに

新潟産大（梅比良真史学長）と同附属高（藤井泰昭校長）が24日、合同で鯨波海水浴場の海岸清掃を行った。雨上がりの曇り日差しの下、高校生は大学生と一緒にごみを拾い集めた。

年度は新型コロナウイルスの影響で中止となり、本年度は同大校友会15人と附属高1年生135人が参加した。鯨波コミセンで行った開会式で、高橋成夫副学長は「地域の自然環境を維持し、楽しい海水浴シーズンが迎えられるよう、協力しながら頑張ってもらいたい」と呼び掛けた。

大学生と高校生は各班に分かれて海岸へ移動し、作業を開始。砂浜には海外からの漂着ごみもあり、高校生はそれを持ち帰って、今後の地域課題解決への学習資料にした。作業後、産大の地域通貨「風輪通貨」が



高大連携活動で海岸清掃をした産大生と産附生＝24日、鯨波海水浴場

配られ、地域振興にもつなげた。

産附1年の関友里奈さんは「中学校までは、大学生と関わる活動がなかったのが新鮮。地元のをみんながきれいに使ってくれたらうれしい」とこみの多さに驚いた。産大の吉野和真・学友会長（3年）は「重い物、大きな物も高校生が一生懸命運んでくれた。海は柏崎の大切な観光資源。ポイ捨ての少なさも、利用者の高い意識の表れだと感じたと話した。」

「新約産業」 地域に学び 実践をふみす

—— 史政活動レポート ——

青年会議所と 学生が拓く未来

柏崎青年会議所のメンバーと柏崎市内の学生が「移住・定住」をテーマとしたグループワークに取り組むイベント「地方の虎」が開催された。新潟産業大学、新潟工科大学、新潟病院附属看護学校の学生30名が参加し、共に柏崎の未来を拓く（ひらく）アイデアを出し合った。

「虎」(評価者)によって最優秀賞が選ばれた。優れたアイデアは、バーナーチームを通じて、今後の柏崎刈羽地域の施策提案として採用される可能性もある。

「持続可能なまちづくり委員会」委員長の中村勇騎さんは、「前向きに参加してくれたる学生たちの姿を見て、柏崎刈羽の未来は明るいと感じ

られた施策案を学生がプレゼンし、柏崎市移住定住推進パートナーチームの間島博英さんら3名の「虎」(評価者)によって最優秀賞が選ばれた。優れたアイデアは、バーナーチームを通じて、今後の柏崎刈羽地域の施策提案として採用される可能性もある。

た。今後は検討した内容の実現に向けて、学生たちと主体的に行動していきたいと展望を語った。今回の取り組みが一夜限りの思い出で終わることなく、具体的なアクションに繋(つな)げてい

けるよう、若い世代の熱い思いを全力で応援していきたい。
地域連携センター長、
経済学部・准教授 権田
恭子
(同大学地域連携センタ



「東アジア理解講座」 12論文とコラム一冊に 産大 金光林教授が編さん

新潟産大の金光林教授が編著者となり、「東アジア理解講座―歴史・文明・自然・環境」（発行所・明石書店）が出版された。金教授は2022年からユーラシア財団「from Asia」の助成を受け、同大で東アジア理解講座を開設。対面やオンラインで、国内外の優秀な研究者によるオムニバス形式の講義を

行い、その成果をまとめた。金教授は11年から10年以上にわたり、同大経済学部で「東洋史」の講義を担当してきた。この間、日本の大学教育で東アジアの歴史に関する内容が中国史中心に展開されていることが多く、またアジア全体に対する多面的理解を助け、分かりやすい書物が少ないことにも

気がついた。同書は、助成講座の講師から協力してもらい、この講座のテキスト、大学教育の東アジア理解の参考書としても活用を目指した。第一部の「東アジアとは？」、第二部の「東アジアの地域」、第三部の「東アジア間の交流と統合」の三部構成で、12章の論文とコラムからなる。

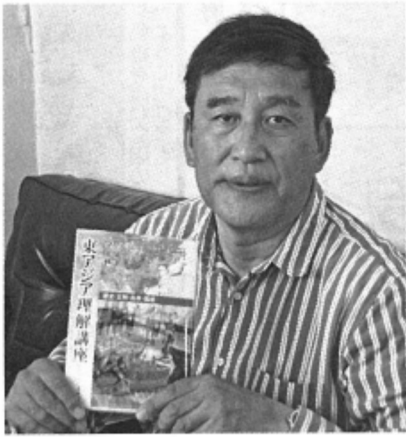
この中で、金教授は「十九世紀に海を渡った一本の標本から考える東アジア」の題で、東アジアの歴史を正しく理解するためには、農耕、遊牧、海洋という東アジア文明を構成する基本生活様式をバランスよく証明しなければならぬという点に焦点を当てた。

また同大の沼岡努名誉書籍「東アジア理解講座―歴史・文明・自然・環境」と編著者の金光林・新潟産大教授

教授はユーラシア大陸の自然環境について詳細に解説し、片岡直樹教授は仏教がアジア各地域に伝播され、独自の美術作品を創造する過程を分析した。

このほか国内外の教授陣は、近代の西歐人の視点ではなく東アジア固有のアイデンティティー探求の必要性、中央アジアと東アジアとの過去と現在の関係、東アジアでの人的交流と共生の関係を論じた。米國ワシントンのアジア研究所、エマニエル・パストリッチ理事長はコラムで「今時代に儒教の偉大な知的伝統の価値を見つめるための必要性」を記した。

同書はA5判314ページ。表紙には、東アジアの地図に青銅器を入れ、東アジア文明を構成する農耕、遊牧、海洋、オアシスの生活様式を形象化した。価格は1冊3千円（税別）。



金光林・新潟産大教授